

# 「聖カルロのペスト」期の 宗教行列に関する研究ノート

大 野 陽 子

Study Notes for Processions in Times of “S. Charles Borromeo’s Plague”

Yoko OHNO

## はじめに

イタリアにおいては1954年から62年にかけて『スペクタクル百科事典』の出版を皮切りに、近世イタリアの祝祭やスペクタクル、それに付随するエフェメラルな芸術の研究が本格化し、1977年にはファジョーロ・デッラルコが『バロックのエフェメラル』でバロック期のローマで行われた様々な祝祭で用いられた仮設の装置を総覧するなど、芸術の一分野としての祝祭やスペクタクルに関する研究が確立していく<sup>1</sup>。近世イタリアの諸都市では教会内で行われる各種の典礼や教会外で繰り広げられるカーニヴァル、都市空間と聖堂の両方を舞台にした宗教行列、君主の葬礼や入市式のような政治的な儀式などが聖俗それぞれの権力者により挙行されたが、本稿では、カトリック期のミラノで大司教カルロ・ボッロメオ（在任1564-84）が主催した宗教的な祝祭、特に都市空間と聖堂の両方を舞台にした宗教行列に焦点を絞る。「聖カルロのペスト」とも呼ばれる1576年のペスト禍の最中、カルロ・ボッロメオはペスト平癒祈願として「聖釘」の宗教行列を行い、その翌1577年に「ニーヴォラ」と呼ばれる装置を使った「聖釘」の行列、「十字架の留」を起点とした「聖十字架同信会」による行列を導入した。3つの宗教行列はそれぞれ個々に行列の起点、巡行先、経路、それぞれで利用された仮設の装置や既存の絵画や彫刻の利用、聖職者による説教や宗教音楽など行列を構成する多様な要素を再構成した上で参列者による受容も含めて分析すべきものであるが、3つの宗教行列の挙行次第を追うと、1576年と1577年の「聖釘」の行列の関連だけでなく、「聖十字架同信会」の行列と1577年の「聖釘」の行列の関連が浮かび上がる。そこで本稿では、これら1576年を契機に生まれた宗教行列の個別研究の前段階として、その成立時期に焦点を当てて概観し、相互の関連を確認していく。

## 1 先行研究

1973年に開催された『ロンバルディアの1600年代』展に絵画・彫刻といった恒常的な芸術だけでなく、同時代の祝祭に関連する版画が出展され、1982年にはダッライが聖体行列を始めとするカルロ時代の宗教行列を概括したように、近世ミラノにおける祝祭は、20世紀後半の祝祭研究の黎明期に研究の俎上に上り始める<sup>2</sup>。本論で取り上げるカルロ・ボッロメオによる宗教行列に関しては、ブラッティが1982年にカトリック改革期のミラノの都市再編を論じた『典礼都市』の中で、「十字架の留」の行列を都市空間を「典礼の場」とするものと分析し、1985年にバルディザリが歴史学的観点から「十字架の留」の行列を主催する「聖十字架同信会」の活動に関するモノグラフを上梓する<sup>3</sup>。1986年に「ニーヴォラ」による「聖釘」昇降の儀式が復活したのを期にルッジェー

りが『ミラノ大聖堂の聖釘』と『ミラノ大聖堂事典』の「聖釘」の項目で「ニーヴォラ」を使った「聖釘」の行列を取り上げ、近年、行列の巡行先になったサン・セポルクロ聖堂の修復が進展したことで総合的な再構成の可能性が高まっている<sup>4</sup>。2000年代以降、ミラノの祝祭はケンドリックらが音楽面から分析し、ジョーンズがカルロ・ポッロメオの列福の際に描かれた「カルロ伝」連作をはじめとするカルロ像の作品研究に絡んでペスト平癒祈願行列を取り上げるなど英米圏の研究者の関心が寄せられている<sup>5</sup>。スコフィールドは、カルロ時代のミラノの公空間での聖遺物に関する2004年の論文でカルロのいとこフェデリコ・ポッロメオが大司教任期（1595-1631）に「十字架の留」の目的が受難信仰の推進からミラノ司教区の聖人崇敬へと変わったと指摘した<sup>6</sup>。2015年にはスチュワートが近世ミラノにおける受難信仰と同信会に関する博士論文の一章を「十字架の留」に充て、豊富な資料研究によって「聖十字架同信会」による行列を再構成し、行列による都市空間の聖化すなわちミラノの典礼都市化の詳細を明らかにし、「十字架の留」の様態の分析によってスコフィールドが指摘した「十字架の留」の意味の変化を裏付けた<sup>7</sup>。

## 2 「聖カルロのペスト」と宗教行列

「黒死病」と呼ばれるほどヨーロッパを壊滅状態にした14世紀の大流行以来、18世紀後半に公衆衛生的措置と社会的措置が充実するまで、ペストは周期的に発生しては猛威を振るい、社会秩序を混乱させた<sup>8</sup>。感染力が強く、致死率の高いペストの流行は近世においては「神の罰」とも捉えられる大災厄であった。北イタリアを代表する都市ミラノにおけるペスト禍については、19世紀にイタリアの国民的作家マンゾーニが『いいなづけ』がとりあげた1630年のペスト禍がつとに知られているが、美術に大きな影響を与えたのはそれに先立つ1576年のペスト禍である。この所謂「聖カルロのペスト」は、1564年に閉会したトレント公会議の最終会期を主導したカルロ・ポッロメオが大司教としてカトリック改革を推進していた時期に起こる。スペイン支配下のミラノを統括すべきミラノ総督や貴族たちは郊外へ逃げ出し、代わって大司教が私財も投げうってペスト対策に当たった<sup>9</sup>。そのようなカルロ・ポッロメオの姿は数々の宗教美術に表され、1610年の彼の列聖後はペスト聖人としてのカルロ・ポッロメオ図像が確立する<sup>10</sup>。1602年のカルロの列福に際して制作された28点からなる「カルロ・ポッロメオ伝」連作ではペスト関連の主題が3点あり、うち2点にペスト平癒祈願のためカルロ自ら聖遺物「聖釘」をもって宗教行列した様子とペスト後の「十字架

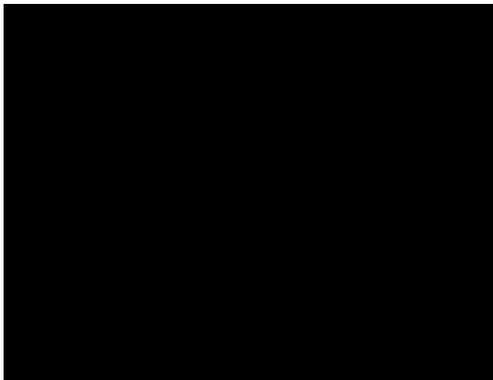


図1 フィアンミンギーノ《カルロ・ポッロメオによる「聖釘」の行列》1602年、テンペラ、キャンパス 600×475cm、ミラノ大聖堂

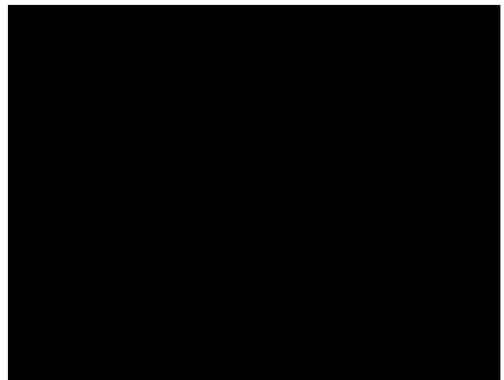


図2 チェラーノ《十字架の留の建立》1602年、テンペラ、キャンパス 600×475cm、ミラノ大聖堂

の留」の建立が描かれている<sup>11</sup>。【図1】【図2】

カルロ・ボッロメーオは1565年の第一回ミラノ管区会議で「宗教劇について」という教書を発布し、俗人による宗教劇や宗教行列を禁止し、世俗化したカーニヴァルに対しても厳しい立場をとった<sup>12</sup>。それらに代わるものとして聖職者が信徒を導く形での宗教行列を推奨し、そのための細目をも作成した。その彼がペスト平癒祈願のために自ら執り行ったのが「聖釘」の宗教行列である。ペスト終息後、「聖釘」の宗教行列は年中行事となり、「聖釘」の昇降に「ニーヴォラ」という装置が使われるようになる。またカルロが終息後に導入した「十字架の留」の同信会活動でも行列が行われた。このようにカトリック改革の下、世俗的な祝祭や演劇が規制された一方で、「聖カルロのペスト」を契機に大司教主導で新たな宗教行列が生み出された<sup>13</sup>。後者 一つは年中行事となり、カルロのいとこフェデリコ・ボッロメーオの大司教任期中（1595-1631）に発展していく。

### 3 「聖釘」の宗教行列

キリストを十字架に磔にする際に用いられた「聖釘」は伝承によるとコンスタンティヌス大帝の母、聖ヘレナが聖十字架とともに発見したとされる<sup>14</sup>。ミラノの「聖釘」は4世紀以来、大聖堂の前身であるサンタ・テクラ聖堂にあったとされているが、記録に初めて言及されたのは1389年のことである。サンタ・テクラの廃立に伴い1461年に現大聖堂に遷移され、後陣の高さ42mのヴォールト天井に設置された。1576年にペストがミラノに蔓延するとカルロ・ボッロメーオはこの聖遺物を降ろし、ペスト平癒祈願行列を行った。ミラノ市民ジャンバッティスタ・カザーレはその様子を日記に記している<sup>15</sup>。

ボッロメーオ枢機卿閣下は、人類の贖罪のためにいとも聖なる肉を聖十字架の木材に打ちつけた、いとも聖なる釘を我々の主イエス・キリストの最大の恩寵を得んがために降ろさせ、ミラノの大聖堂の主祭壇の上に置き、それから1576年10月3日にあの三度の宗教行列の初日の行列を始めた。

十字架型の容器に入れた「聖釘」を掲げ、フードを目深にかぶり、罪びとのように首に荒縄を巻き、裸足で歩くカルロ・ボッロメーオの後ろを聖職者や貴族、街に残った行政官たち、教区ごとの旗を掲げたミラノ市民たちが感染の危険から距離を保ちながら歩いた様子はフィアンミンギーノの絵に写し取られている<sup>16</sup>。【図1】

ジュッサーノが1610年に著した『聖カルロ伝』によると、初日にサンタンブロージョ聖堂、2日目にサン・ロレンツォ聖堂、3日目にサンタ・マリア・ブレッソ・サン・チェルソ聖堂へ巡行したという<sup>17</sup>。ミラノの守護聖人である聖アンブロジウスに捧げられたサンタンブロージョはミラノにおいて最も重要な聖堂であり、大聖堂と共にミラノの信仰の核である。日目の巡行先サン・ロレンツォ聖堂は、初期キリスト教時代の殉教聖人ラウレンティウスに捧げられて4世紀末から5世紀初頭には創建されていた古刹で、盛り土の上に建っていたことからオリブ山に見立てられ、17世紀までは聖週間初日のエルサレム入城を記念する「枝の主日」の行列の起点となっていた<sup>18</sup>。3日目の巡行先サンタ・マ

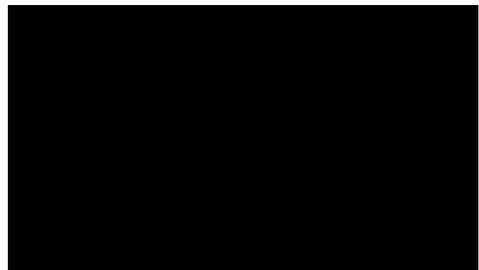


図3 作者不詳「奇跡の聖母」フレスコ、ミラノ、サンタ・マリア・ブレッソ・サン・チェルソ聖堂

リア・プレッツ・サン・チェルソ聖堂は、聖アンブロジウスが描かせたとされる聖母像による奇跡で知られ、サンタ・マリア・デイ・ミラーコリ（奇跡の聖母）とも呼ばれていた<sup>19</sup>。【図3】巡行先は、対抗宗教改革において重要性が強調されていた教会史に結びつく守護聖人、初期殉教聖人、聖母に捧げられており、これらの聖堂の選択は信仰の刷新といった意図をもっていただと考えられる。

サンタンブロージョへの行列では「磔にされたイエス・キリストの像のついた十字架」が掲げられていた<sup>20</sup>。ジュッサーノは贖罪のためにキリストが十字架を運ぶ受難を想起させる表現でこの行列の様子を語っている。サン・ロレンツォへの行列も「最初と同じ方法で」<sup>21</sup>とあり、大司教が聖釘を運んだのは3日目のサンタ・マリア・プレッツ・サン・チェルソへの行列でのみである。この「他の度に比べ最も有名な」行列に際してカルロは「最大限に民の心を崇敬へとつき動かすため」「諸聖人たちの助力を懇願するため」修道士や聖職者らが各々の聖堂に保管する聖遺物を持って行列に参加するよう望み、「大聖堂の頂から、かの最も聖なる聖遺物である聖釘を降ろし」「透明の水晶で覆われた木製の大きな十字架の中に」納めて行列を行ったという<sup>22</sup>。【図2】このようにサンタ・マリア・プレッツ・サン・チェルソへの宗教行列は受難の聖遺物「聖釘」が諸聖人の聖遺物を先導する形をとって行われたのである。

サンタ・マリア・プレッツ・サン・チェルソは奇蹟を起こす聖母像とヴェールへの崇敬で知られ、「天の女王の功德と仲介により授けられた多くの恩寵ゆえに民が」<sup>23</sup>集まる聖堂であったことも同聖堂が「聖釘」の行列の巡行先選ばれた理由と推測される。「奇蹟の聖母」はすでに1430年代からいくつかの小さな奇蹟を起こしていたようだが、その後も続く崇敬の起源となるのは1485年12月30日起こった聖母出現の奇蹟である。ミサの最後に聖母像が自らヴェールを上げて信者に姿を表したと伝えられている。奇蹟が起こった1485年もミラノはペスト禍に襲われ4829人が死亡したといひ、これは「聖カルロのペスト」での死亡数に次ぐ<sup>24</sup>。1485年の奇蹟を伝える同時代史料によると妻のペスト平癒を感謝してのミサ参列者がいるように、その年のペストを聖母が終息させたと考えられていたのであろう<sup>25</sup>。カルロは「罪人の仲介者である慈悲の真の母たる処女マリアの仲介を願って」<sup>26</sup>聖母にペスト平癒を祈願したと伝えられているが、この古い聖母像の前で前世紀のペスト以来の奇蹟を願ったのではないだろうか。

ジュッサーノは三度の行列は6世紀に教皇グレゴリウス1世がペスト平癒のために行ったペスト行列に倣ったものと記している<sup>27</sup>。14世紀以来、グレゴリウス1世の行列はペスト終息祈念の行列のモデルとなっており、16世紀後半にはオラトリオ会士チェーザレ・パローニオの『教会史』において大グレゴリウスがこの行列の際にサンタ・マリア・マッジョーレ聖堂に納められている聖ルカが描いたとされる聖母イコン「サルス・ポプリ・ロマーニ（ローマ市民の救い）」を運んだと明言される<sup>28</sup>。カルロ・ボッロメオが「奇跡の聖母」像のある聖堂を行列先として選んだのはグレゴリウス1世の行列に倣う意図があったとも推測できよう。しかし、ローマを始め、イタリア各地のペスト行列が聖母崇敬に収斂される傾向があり、行列の先頭に掲げられる行列旗に聖母イメージが施されたのに対して<sup>29</sup>、カルロによるペスト平癒祈願行列では磔刑像や「聖釘」が掲げられた。サンタ・マリア・プレッツ・サン・チェルソ聖堂での祈願が終わり、再び大聖堂に戻された「聖釘」は主祭壇に安置され、その前でキリストの死から復活までの40時間、祭壇上に顕示された聖体に祈りを捧げるクワラントーレ（Quarantore）が行われたという<sup>30</sup>。「奇跡の聖母」に祈願に赴いてはいるものの、三度目の行列もこのクワラントーレで締めくくられることによってキリストの受難と死と復活という明確なテーマに沿っていたと考えられる。

1576年の行列の巡行先はいずれも大聖堂の南西部に位置するが、クワラントーレが終わると、カルロは「先の三度の行列よりも長く、かなり困難な行列」を行い、「手にいとも聖なる釘を持って町中を回った」とあり<sup>31</sup>、都市全体が典礼の場となった。このようにペスト平癒祈願行列は「聖

釘」に象徴されるキリスト受難への祈りによる都市空間全体の聖別で終わる。これを年中行事としたのが、次に見る「聖十字架発見の祝日」の宗教行列である。

#### 4 「ニーヴォラ」と「聖十字架発見の祝日」の宗教行列

「ニーヴォラ *nivola*」とはロンバルディアの方言で「雲」を意味し、普段は大聖堂のヴォールト天井に設置されている「聖釘」を宗教行列に際して昇降するための昇降装置である。ペスト禍の翌年、1577年5月3日すなわち「聖十字架発見の祝日」にカルロ・ボッロメオは「ニーヴォラ」の昇降儀式を伴う「聖釘」の宗教行列を行った<sup>32</sup>。1797年まで毎年行われていたこの宗教行列は、ミラノを支配下に置くオーストリア皇帝ヨーゼフ2世が定めた公共の場での宗教行為の制限をうけて廃止されたが、1982年に聖週間と9月14日の「聖十字架称賛の祝日」に「聖釘」の展覧が復活し、大聖堂創建600周年を記念して86年からは「ニーヴォラ」による昇降も伴うようになった<sup>33</sup>。ただし行列は行われず、「聖十字架称賛の祝日」から3日間、「聖釘」が聖職者席内に展覧されるのみである。【図4】【図5】

カルロの秘書の一人ジョヴァンニ・バッティスタ・ポッセヴィーノが彼の『カルロ伝』の中で「聖十字架発見の祝日」の行列を「[カルロが行った宗教行列のうち] 特にとっても崇敬な」<sup>34</sup>と評し、ミラノのイエズス会士パオロ・ピーショラは1577年に表したペストの報告書で「豪華さと喜びと勝利」を伴うものだったと記している<sup>35</sup>。現在9月に挙行される「聖釘」の昇降では楕円形の一種の張りぼての表面に雲間に天使たちが飛ぶ様子が描かれた「ニーヴォラ」【図4】が使われている。この絵画制作に対しては1612年5月に画家ドゥキーノに支払いがなされている。しかし、カルロは1577年の「聖十字架発見の祝日」に先立つ2月の教令で昇降装置を作るように指示しており、当初から「ニーヴォラ」が使われている<sup>36</sup>。ジュッサーノは「驚異的な技術で作られた輝かしい雲のような、光を発する装置」と記し、カルロの秘書で後にノヴァーラ司教となるカルロ・バスカペーもまた「内側に置かれた灯りで非常に輝かしい雲のような外観が与えられた」昇降装置によって司教たちが高みに登っていくのを見た儀式の様子を描写している<sup>37</sup>。このようにその始まりと終わりに参列者の目を驚かすスペクタクルな儀式を伴ったものであった。



図4 「ニーヴォラ」1612年

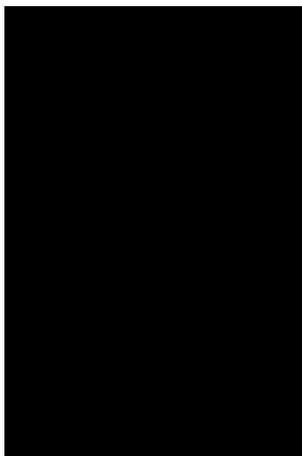


図5 「ニーヴォラ」の儀式



図6 ミラノ、サン・セポルクロ聖堂、1030年創建

大聖堂の天井の高みから降ろされた「聖釘」の巡行先は、前年の行列で巡った聖堂のいずれでもなく、大聖堂広場の西側のミラノで最も古い地区にあるサン・セポルクロ聖堂であった。イタリアには珍しい西構のロマネスク様式のファサードを持つこの聖堂をカルロは「ミラノの中心」と呼び、ジュッサーノは「我らの救世主の受難と死に捧げられた聖堂」であり、エルサレムの聖墳墓聖堂の模造と記している<sup>38</sup>。【図6】古代ローマ時代のフォールムがあった場所に位置する同聖堂は1030年に造幣局長官ベネデット・ローゾによってサンティッシマ・トリニタとして創建され、地下聖堂を備えた聖堂空間は当初から「キリストの生涯と受難」の主題によって分けられていた<sup>39</sup>。1110年にミラノ大司教アンセルモ・ダ・ポビージオによる祭壇の聖別の折に聖堂は十字軍によるエルサレム奪還を記念してサン・セポルクロ（聖墳墓）と改名される。聖別された祭壇は地下聖堂の主祭壇であり、地下聖堂のアプスはエルサレムの聖墳墓聖堂内にある「キリスト復活のロトンダ」を模したと考えられている<sup>40</sup>。祭壇の聖別に際し大司教は「キリストの身体が横たえられている聖墳墓に赴けない者のために、聖墳墓に似せたミラノの聖墳墓を訪れる者に、同じ贖宥を付与」し、聖土曜日にサン・セポルクロから大聖堂への聖職者による宗教行列を制度化したという<sup>41</sup>。

続く世紀に堂内はキリストの受難と復活を主題とする絵画や彫刻で彩られた。14世紀に地下聖堂に設置された大理石の棺【図7】の表面には天使に囲まれる空の棺と眠る兵士たち、側面には「聖墳墓詣で」「我に触れるな」の場面が浮彫で施され、キリスト復活を表している<sup>42</sup>。地下聖堂の壁面には12世紀から16世紀の間に描かれた様々なフレスコ画の痕跡が残っている。16世紀初頭の壁画にはキリスト受難の各場面が描かれている<sup>43</sup>。地下聖堂にはまた15世紀末から16世紀初頭の間《死せるキリストの哀悼》を表す彩色されたテラコッタ製の群像【図8】が設置された。聖堂地上階にもこの種の群像があったことが1576年の巡察記録から知られている<sup>44</sup>。主祭壇の後方には、カルヴァリオ山を模した構築物の上に彫像によって磔刑の情景が表され、脇祭壇にも「ピエタ」の彫像が見られたという。

《死せるキリストの哀悼》群像は近年、修復が終わり、現在は一時的に聖堂地上階に置かれている。群像彫刻に関しては15世紀末から16世紀にロンバルディア各地の聖堂やサクロ・モンテにおいて作られた木彫やテラコッタによる等身大の群像と関連づけられている<sup>45</sup>。【図9】18世紀に代替された木彫キリスト像を除く8体は15世紀末から16世紀初頭にかけてロンバルディア地方北西部で塑像製作者として活動し、1470年代にミラノのサンタ・マリア・プレッツォ・サン・サーティロ聖堂の《死せるキリストへの哀悼》を制作したアゴスティーノ・デ・フォンドゥリスの工房作と見なさ

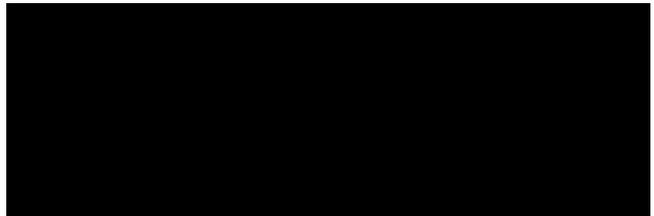


図7 カンピオーネ派の彫刻家「石棺」14世紀、大理石、ミラノ、サン・セポルクロ聖堂、地下聖堂

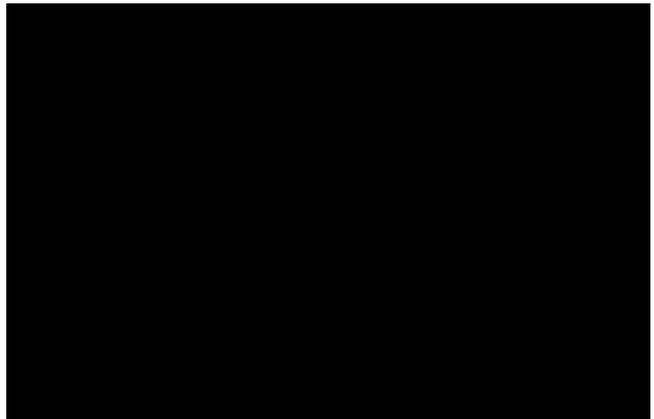


図8 アゴスティーノ・デ・フォンドゥリス工房《死せるキリストへの哀悼》15世紀末～16世紀初頭、ミラノ、サン・セポルクロ聖堂

れていたが<sup>46</sup>、近年の修復によって同工房作に帰されるのは5体のみで、後景の子供を抱く女と前景で跪く2体は、カルロ・ボッロメオの指示で16世紀末から17世紀初頭に行われたサン・セポルクロ聖堂建築や調度の「改革」を期に古い塑像の代替として作られたものと判明している<sup>47</sup>。

16世紀初頭には地下聖堂はマグダラのマリア同信会の祈りの場となっており、1527年には同信会の女子会員たちが降誕祭、復活祭、聖霊降誕祭、聖母被昇天祭に地下聖堂の石棺の前でクワラントーレを始めた<sup>48</sup>。堂内に見られるキリストの受難と死をテーマにする絵画と彫刻は、この同信会の活動との関連が指摘されている<sup>49</sup>。スキアーヴィは、平信徒による信心の場であったサン・セポルクロ聖堂は1578年には大司教自身が創設したオブラート会に委嘱され、彼が構想する「典礼都市」としての新しいミラノの中心となったと指摘している<sup>50</sup>。

カルロの指示に基づく聖堂の「改革」に伴って、1576年の巡察時に聖堂の地上階に見られたカルヴァリオ山と彫像からなる「磔刑」と「ピエタ」も失われた。しかし、1577年にカルロが「聖釘」の行列を行った時点では、聖堂主祭壇後方に設けられたカルヴァリオ山と彫像からなる「磔刑」が迫真性を持って行列を迎え、参列者はカルロが説教を行う間、キリストの体を十字架に打ちつけた聖遺物と磔刑の場面を同時に目にするようになっていた。リアルに表された「磔刑」の群像は聖遺物の背後にある歴史を伝え、聖遺物はこのイメージに更なる真実味を与えたであろう。

サン・セポルクロ聖堂から大聖堂に戻された「聖釘」は、すぐにヴォールト天井に安置されるのではなく、前年のペスト平癒祈願行列の最終日と同様に、堂内に安置された「聖釘」の前でクワラントーレが行われた<sup>51</sup>。ナヴォーニはカルロがサン・セポルクロ聖堂で平信徒たちが行っていた受難崇敬とクワラントーレを「聖釘」崇敬に結びつけたと指摘している<sup>52</sup>。カルロは翌1577年10月9日の書簡でサン・セポルクロの地下聖堂に「祈りの修練のために受難の聖なる場面の24の礼拝堂」を設けるようにノヴァーラ司教スペチャーノに指示し、受難の黙想の場として整えようとした<sup>53</sup>。この計画によって作られた群像のうち現残するのは、大聖堂造営局で活動していた彫刻家たちによる《弟子の足を洗うキリスト》と《カイヤファの前のキリストとペテロの否認》のみである<sup>54</sup>。

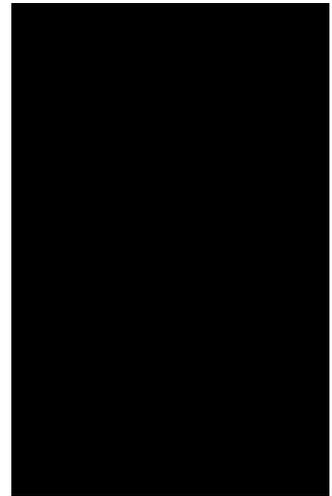


図9 ジョヴァンニ・アンジェロ・デル・マイーノ、1514 15年、彩色木彫、コモ大聖堂

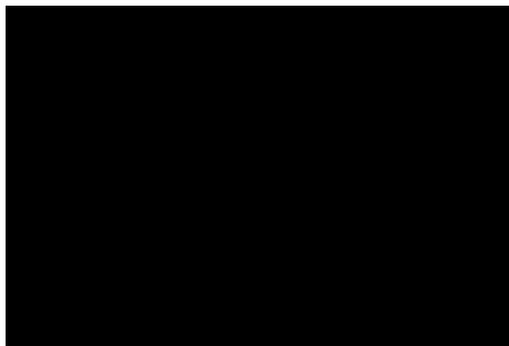


図10 フランチェスコ・ブランピッラ (子)、アントニオ・ロッタ、ピエトロ・アントニオ・ダヴェリオ《洗足》1579年頃、彩色テラコッタ、サン・セポルクロ聖堂

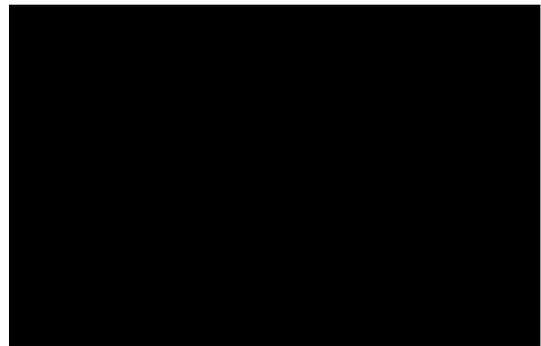


図11 フランチェスコ・ブランピッラ (子)、アントニオ・ロッタ、ピエトロ・アントニオ・ダヴェリオ《カイヤファの審問所》17世紀初頭、彩色テラコッタ、サン・セポルクロ聖堂

【図10】【図11】近年の研究では計画は地下聖堂のみならず地上階や聖堂前の広場にも群像を配する形へ発展していたと指摘されており<sup>55</sup>、この構想の中で「聖十字架発見の祝日」における「聖釘」の行列を位置づける必要があるだろう。

## 5 「聖十字架同信会」による宗教行列

1576年に行われた「聖釘」の行列は聖遺物に象徴されるキリスト受難への祈りによってミラノ全体を聖別するものであったが、ペスト禍における都市の典礼化の事例は他にも見られた。カルロ・ボッロメーオは検疫下でミサに行けない信者のため広場や街路に仮設祭壇や頂に十字架の付いた柱を設置させ、そこで行われるミサに家の中から参加するように仕向けたのである<sup>56</sup>。ジュッサーノによると、大司教は仮設祭壇の近隣住民が昼夜それぞれ7回ずつ「その時課に必要で、ふさわしい詩編や連祷、その他の祈りを唱えながら」祈るように命じ、「大聖堂の鐘が鳴るとともに、祈りの時課には家族全員で窓辺に行き、[屋外で] 司祭かそれに相当する者が祈り始めると、他の者たちは皆、ひざまずいて、祈りの最後の最後までそれに応唱したという<sup>57</sup>。

ミラノでは1524年のペスト禍の折にも木造の十字架が市中に建てられており、カルロはペストを期にこの伝統を刷新しようとしたのである<sup>58</sup>。ペスト終息後、この「十字架の付いた柱」とその周りでの祈りを恒常化させるために建立されたのが「十字架の留 *croci stazionali*」【図12】である。カルロ自身はこれを「十字架の軍旗」と呼んでいるが、先行研究においては、これらの十字架が中世以来、キリスト受難の模倣としての信心業である「十字架の道行 *Via Crucis*」を行う際に信者が祈りのために留まる場、「留」（ラテン語で *statio*）として立てられていた十字架を思わせるとして「十字架の留」と呼ばれ、本稿でもそれに倣う<sup>59</sup>。「基礎や台座の上に造られたそれらの祭壇や石造りの柱があった場所に」建立された「十字架の留」は、「頂にキリストの磔刑像のある大きな十字架」が冠せられ、足元には祭壇が設けられていた<sup>60</sup>。カルロは「その神聖な信仰を永遠に生きたものに保てるように、それぞれの十字架の近隣の者からなる敬虔な人々の団体」<sup>61</sup>すなわち「聖十字架同信会」を設立させ、毎晩、教区聖堂の鐘の音とともに「十字架の留」に集い、夜の祈禱を行うように指示した。それは、ジュッサーノが次のように語ったようなペスト禍の昼夜の祈りによるミラノの聖化の再現であった<sup>62</sup>。

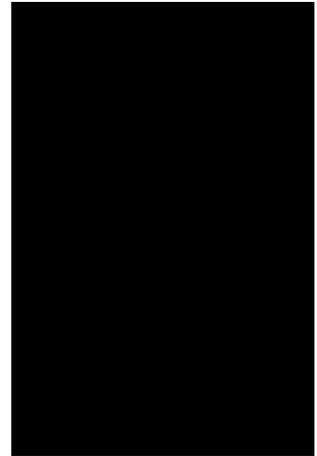


図12 「十字架の留」1580年建立、ミラノ、アウグスト広場

30万もの人が街のあらゆる場所で同時に神を賛美するのを見、この公の惨禍の中で天に救いを求める際限のない声が響きを聴くのは非常に驚くべきことであり、万人の心を和らげる。たしかにいまやミラノはそれぞれの僧坊に籠って神に仕える奇跡的な男子修道院、女子修道院のようであるだけでなく、天の階級に満たされた、もうひとつの聖なるエルサレムのようである。

1577年の「聖体の祝日」の前夜6月5日に大司教は大聖堂とスフォルツァ城の間にあるコルドゥジオ広場に建てられた最初の「十字架の留」【図2】を建立させた<sup>63</sup>。1578年1月25日にペスト終息を感謝する宗教行列が行われた際に1577年末からその日までに建立された「十字架の留」が

祝福された<sup>64</sup>。また同年4月20日の日曜日に4か所の「十字架の留」の同信会が設立され、会員たちは大聖堂の地下聖堂でのミサで聖体を授かり、行列用木製十字架と会員が胸にかける小さな十字架も祝福を受けたという<sup>65</sup>。カルロの時代に19の「十字架の留」と同信会が誕生し、カルロのいとこフェデリコの時代には36を数えた<sup>66</sup>。

ミラノ市中各地に点在する「十字架の留」に集う「聖十字架同信会」は、折々の祝日に「十字架の留」の下に仮設祭壇を作り、そこを起点として宗教行列を行ってもいた<sup>67</sup>。最初に設立されたコルドゥジオの「聖十字架同信会」の1577年の会則によると、聖体の祝日前夜、毎月第一日曜日と主な祝日、毎金曜日の夜、聖金曜日に行列を行うよう定められた<sup>68</sup>。

聖体の祝日前夜、毎月第一日曜日と主な祝日の行列、毎金曜日の夜の行列は、「十字架の留」から大聖堂まで十字架を掲げていき、大聖堂内で「聖釘」の前で定められた回数の祈りを唱えてから、再び「十字架の留」の下に戻り、通例の夜の祈祷を行うという簡素なものだった<sup>69</sup>。これに対して聖金曜日の行列は巡行先が多く、「十字架の留」からミラノ市内に点在する七大聖堂を巡り、最後に大聖堂の「聖釘」の前で祈り、地下礼拝堂に顕示されている聖体を礼拝するというものだった<sup>70</sup>。

聖金曜日の行列で同信会員が巡ったミラノ七大聖堂は、中世には大聖堂とその周辺の6聖堂から成っていたが、1576年のミラノにおける「聖年」を期に新たに選びなおされた<sup>71</sup>。初期殉教聖人に捧げられた6聖堂は、近世に拡張されたミラノの市域をほぼ円状に点在している。ジュッサーノは1593年の著書『七大聖堂の書』で、七大聖堂のそれぞれを「キリストの受難」の特定の場面と結びつけ、信者にそれらを巡りながらキリストの生涯と受難を黙想するよう促している<sup>72</sup>。「聖十字架同信会」による聖金曜の行列においても、同信会会員たちは七大聖堂を巡りながら黙想を行い、最後に大聖堂で受難のクライマックスである「磔刑」にまつわる「聖釘」に祈り、地下聖堂で復活祭を待つ「聖体」を礼拝したのであろう。

「聖十字架同信会」の行列は「聖十字架発見の祝日」にも行われ、同信会会員はサン・セポルクロ聖堂に集まってから大聖堂まで行列し、「聖釘」の前で祈り、それぞれの留に戻ることであった<sup>73</sup>。カルロは1584年の死の直前に、サン・セポルクロ聖堂を本部とするオブラート会の活動に「聖十字架同信会」を結び付け始め、復活祭の説教の終わりには、毎金曜に大聖堂で行われる受難の説教、「聖十字架同信会」、サン・セポルクロ聖堂へ信者たちの注意を向けさせていた<sup>74</sup>。サン・セポルクロ聖堂は大聖堂とともに「聖十字架同信会」の行列においても重要な位置を占めていたのである。

1576年の「聖カルロのペスト」の際にミラノ大聖堂に安置されている「聖釘」を掲げてペスト平癒祈願行列を行ったカルロ・ボッロメーオは、ペスト後に2種類の宗教行列を推進した。ペスト平癒祈願行列を年中行事化する目的で翌年から導入された「聖十字架発見の祝日」に「ニーヴォラ」を使ったスペクタクルな儀式を伴う「聖釘」の宗教行列と、ペスト禍の際に市中に建てた仮設祭壇と十字架を冠した柱を恒常化する「十字架の留」を建立し、「留」ごとの「聖十字架同信会」による宗教行列である。以上見てきたように、ペストを契機に生まれたこれらの宗教行列は相互に関連するものとして構想されていた。特に「聖十字架発見の祝日」の行列で巡行先となったサン・セポルクロ聖堂は創建以来、その地下聖堂がエルサレムの聖墳墓の模造としてキリスト受難の崇敬の場であったが、「聖十字架同信会」の活動とも結びついているように、大聖堂と並ぶ信仰の焦点となっていたのである。本稿で確認した行列相互の関係性や典礼都市ミラノにおけるサン・セポルクロ聖堂の位置づけを踏まえて、個々の宗教行列を総合的に分析していきたい。

## 図版出典

- 図 1、2、4 (Buzzi-Zardin 1997)  
 図 3、5、12 (著者撮影)  
 図 6、7 (Ranaldi 2019)  
 図 9 (Casciari 2000)  
 図 8、10、11 (Brambilla Barcillon 2018)

## 註

- 1 *Enciclopedia dello Spettacolo*, vols. 9, Roma 1954 62; M. Fagiolo dell'Arco, *Effimero Barocco, Struttura della festa nella Roma del 600*, vols. 2, Roma 1977 78.
- 2 M.Gregori et al., *Il Seicento lombardo*, catalogo dei disegni, libri, stampe, Milano 1973, pp.67 68, 153 154; A. Dallaj, “Le processioni a Milano nella Controriforma”, *Studi storici*, 23(1982), pp.167 183.
- 3 A. Buratti, “L'azione pastorale dei Borromeo a Milano e la nuova sistemazione urbanistica della città”, in A. Buratti et al., *La città rituale. La città e lo Stato di Milano nell'età dei Borromeo*, Milano 1982, pp.50 55; M.O. Baldissarri, *I “poveri prigionieri”. La confraternita della Santa Croce e della Pietà dei carcerati a Milano nei secoli XVI-XVIII*, Milano 1985.
- 4 F. Ruggeri, *Il Santo Chiodo venerato nel Duomo*, Milano 1984; ID., *Il Duomo di Milano. Dizionario storico artistico e religioso*, Milano 1986, pp.526 531; P.B. Brambilla Barcillon et al., *San Sepolcro Svelato*, Busto Arsizio 2018; A. Ranaldi (ed.), *La chiesa ipogea di San Sepolcro Umbelicus di Milano*, Cinisello Balsamo 2019.
- 5 R. L. Kendrick, *The sounds of Milan 1585 1650*, Oxford 2002; C. S. Getz, *Music in Collective Experience in Sixteenth-Century Milan*, Ashgate 2005; P. M. Jones, “San Carlo Borromeo and Plague Imagery in Milan and Rome”, in G.A. Bailey, et al., *Hope and Healing. Painting in Italy in a Time of Plague, 1500 1800*, Chicago 2005, pp.65 96; ID., *Altarpieces and Their Viewers in the Churches of Rome from Caravaggio to Guido Reni. Visual Culture in Early Modernity*, Adelshot-Burlington 2008, pp.137 200.
- 6 R. Schofield, “Architecture and the Assertion of the Cult of Relics in Milan's Public Spaces”, in *Annali di architettura. Rivista del Centro Internazionale di Studi di Architettura Andrea Palladio*, 16(2004), pp.89 92.
- 7 P.A.V. Stewart, *Devotion to the Passion in Milanese Confraternity: Image, Ritual and Performance*, 2015 Ph. D. Dissertation, pp.212 309.
- 8 クラウス・ベルクドルト (宮原啓子、渡邊芳子訳) 『ヨーロッパの黒死病：大ペストと中世ヨーロッパの終焉』 国文社、1997年；C. M. Cipolla, *Il pestifero e contagioso morbo: combattere la peste nell'Italia del Seicento*, Bologna 2012; 宮崎揚弘 『ペストの歴史』 山川出版社、2015年。
- 9 G. P. Giussano, *Vita di San Carlo Borromeo prete cardinale del titolo di santa Prassede arcivescovo di Milano*, Milano 1610, pp.248ss.
- 10 Jones 2005; Jones 2008; F. Frangi, “Tra ‘vero ritratto’ e fervore devozionale. Riflessioni sull'iconografia di San Carlo in Lombardia nel tardo Cinquecento e nel primo Seicento”, in *Studia Borromaica* 25(2011), pp.211 253.
- 11 M. Rosci, *I Quadroni di San Carlo Borromeo nel Duomo di Milano*, Milano 1965; E.Brivio, *Vita e miracoli di S. Carlo Borromeo. Itinerario pittorico nel Duomo di Milano*, Milano 1995.
- 12 C. Bernardi, *La drammaturgia della settimana santa in Italia*, Vita e Pensiero, 1992, pp.234 235; A. Cascetta, “La «spirituale tragedia» e «l'azione devota». Gli ambienti e le forme, in A.Cascetta, R. Carpani, (eds.), *La scena della gloria. Drammaturgia e spettacolo a Milano in età spagnola*, 1995, p.115 218.
- 13 C. Bernardi e A. Cascetta, “Dai «Profani tripudi» alla «Religiosa magnificenza»; la ricostruzione del sistema cerimoniale nella Milano borromaica”, in F. Buzzi e D. Zardin, (eds.), *Carlo Borromeo e l'Opera della «Grande Riforma». Cultura, religione e arti del governo nella Milano del pieno Cinquecento*,

- Milano 1997, pp.234-240.
- 14 F. Ruggeri, *Il Santo Chiodo venerato nel Duomo*, Milano 1984; ID., *Il Duomo di Milano. Dizionario storico artistico e religioso*, Milano 1986, pp.526-531; N. Bressan, “Devozione al Sacro Chiodo fra Lombardia e Piemonte nell’età moderna”, *Archivio storico lombardo*, vol. XIX(2014), p.245.
  - 15 Carlo Marcona, “Diario di Gambattista Casale (1554-98)” in *Memorie Storiche della Diocesi di Milano*, vol. 12, Milano 1965, p.293.
  - 16 Giussano 1610, p.266.
  - 17 Giussano 1610, pp.267-270.
  - 18 G.A. Dell’Acqua (ed.), *La basilica di San Lorenzo in Milano*, Banca Popolare di Milano, 1985, p.26.
  - 19 拙論「[奇蹟]を想起させる絵画 チェラーノ作《サンタ・マリア・プレツコ・サン・チェルソの聖母像の前で祈るアッシジの聖フランチェスコと福者カルロ・ポッロメオ》」『民族藝術』vol.35, (2019), pp.137-145.
  - 20 Giussano 1610, p.267. 大司教の秘書であったカルロ・バスカペーによる伝記でも同様に述べられている。C. Bascapè, *De vita et rebus gestis Caroli S.R.E. cardinalis*, Ingolstadt, p.141.
  - 21 Giussano 1610, p.269.
  - 22 Giussano 1610, pp.269-270.
  - 23 Giussano 1610, p.269.
  - 24 S. K. Cohn, Jr., *Cultures of Plague. Medical Thinking at the End of the Renaissance*, Oxford 2010, pp.20-21. 「聖カルロのペスト」の死者数は17,239人を数えた。
  - 25 Archivio Diocesano Storico di Milano, *Chiesa-Miracoli*, 1486 Gennaio.
  - 26 Giussano 1610, p.270.
  - 27 Giussano 1610, p.266.
  - 28 新保淳乃「[奇蹟の聖母]とペスト行列 近世イタリア都市国家における集団的嘆願行為と聖母マリア信仰」千葉大学社会文化科学研究科研究プロジェクト報告書 (41) 2000年, pp.1-4.
  - 29 新保 2000, p.2.
  - 30 Giussano 1610, p.270.
  - 31 Giussano 1610, p.270. バスカペーによると大司教はミラノの6つの門の前にある「橋」と呼ばれる地点を巡った。Bascapè 1592, p.143.
  - 32 Ruggeri 1984, pp.11-16; Ruggeri 1986, pp.526-531.
  - 33 Ruggieri 1986, p.529.
  - 34 G. B. Possevino, *Discorsi della vita et attioni di Carlo Borromeo prete cardinale di santa Chiesa del titolo di Santa Prassede arcivescovo di Milano*, Milano 1591, p.215.
  - 35 P. Bisciola, *Relattione verissima del progresso della peste di Milano. Qual principio nel mese d'Agosto 1576 e seguì sino al mese di Maggio 1577*, Bologna 1577, 5r.
  - 36 *Annali della fabbrica del duomo di Milano: dall'origine fino al presente*, vol. V, Gaetano Bricola, 1883, p.79. 現在「ニーヴォラ」の上に設置されている4体の天使像は18世紀の追補である。Ruggieri 1984, p.53.
  - 37 Giussano 1610, p.307; Bascapè 1592, p.169.
  - 38 M. Navoni, “La chiesa di San Sepolcro e i due Borromei”, in Ranaldi 2019, p.195; Giussano 1610, p.307.
  - 39 L.C.Schiavi, ““Civitatem supra montem positam”: Storia, arte e devozione in San Sepolcro dalla formazione al Novecento”, in Brambilla Barcillon 2018, p.115.
  - 40 Schiavi 2018, p.125. ヨーロッパにおける聖墳墓模造について近年の研究として以下が挙げられる。J. E. A. Kroesen, *The Sepulchrum Domini through the Ages. Its Form and Function*, Peeters Publishers, 2001; A. Benvenuti, P. Piatti (eds.), *Come a Gerusalemme. Evocazioni, riproduzioni, imitazioni dei luoghi santi tra Medioevo ed Età moderna*, Firenze 2013; K. Blair Moore, *The architecture of the Christian Holy Land: reception from late antiquity through the Renaissance*, Cambridge 2017; 関根浩子『サクロ・モンテの起源 西欧におけるエルサレム模造の展開』勉誠出版、

2017年.

- 41 M. A. Zilocchi, “San Sepolcro”, in M.T. Fiorio, (ed.), *Le Chiese di Milano*, Milano 1982, p.343; Schiavi 2018, p.111, 126. 聖土曜日の宗教行列はエルサレムの聖墳墓聖堂で遅くとも10世紀には行われていた復活祭前日の徹夜業と関連付けている。
- 42 A. Spiriti, “Le vicende figurative dal primo Duecento al primo Quattrocento”, in Ranaldi 2019, p.171. [以下 Spiriti 2019 a] 石棺の前で祈る聖カルロ・ボッロメオ像はおそらく1610年のカルロの列聖後に加えられた。Id., “Il Sacro Monte urbano da Carlo a Federico Borromeo al Neoclassico”, in Ranaldi 2019, p.205. [以下 Spiriti 2019 b]
- 43 Spiriti 2019c., p.159 74; A. Spiriti, “Le vicende figurative dalla fine del Quattrocento agli inizi del Cinquecento”, in Ranaldi 2019, p.177 83. [以下 Spiriti 2019 c]
- 44 G.Ferri Piccaluga, “L’iconografia della passione e il dibattito sulle Sacre Scritture. Il progetto di un Sacro Monte nella chiesa milanese del Santo Sepolcro nell’età della Controriforma”, in L. Vaccaro, F. Riccardi, *Sacri Monti. Devozione, arte e cultura della Controriforma*, Milano1992, p.174; Schiavi 2005, pp.77; Schiavi 2018, pp.133 134.
- 45 Schiavi 2018, pp.133 38; Spiriti 2019a, p.181. 15、16世紀の群像彫刻については、R. Casciaro, *La scultura lignea lombarda del Rinascimento*, Milano 2000; R. Dionigi, F. M. Ferro (eds.), *Teatri del sacro e del dolore. I Compianti in legno e in terracotta in Lombardia e in Piemonte tra Quattrocento e Cinquecento*, Soncino 2020を、1491年にミラノ司教区北端に創建されたヴァラッロのサクロ・モンテの初期の彫像については拙著『ヴァラッロのサクロ・モンテ 北イタリアの巡礼地の生成と変容』三元社、2008年、pp.70 75を参照のこと。
- 46 S. Bandela-Bistoletti, “La «Pietà» di Agostino de’ Fonduli in S. Satiro nell’occasione del suo restauro”, *Arte Lombarda*, (1983/3 4), pp.71 82;
- 47 F.Bevilacqua, C.Quattrini, “Il restauro in corso del *Compianto* di terracotta della chiesa del Santo Sepolcro a Milano”, in M.G. Albertini Ottolenghi, L.Basso (eds.), in *Terrecotte nel Ducato di Milano. Artisti e botteghe del primo Rinascimento*, Milano 2013, pp.121 123; ID., “Il *Compianto sul Cristo morto* in terracotta e il suo restauro”, in Ranaldi 2019, p.238.
- 48 Navoni 2019 p.197. 1529年にはミラノのすべての聖堂で聖週間以外のクワラントーレが行われるようになった。クワラントーレ全般に関しては、M. S. Weil, “The Devotion of the Forty Hours and Roman Baroque Illusion”, *Journal of The Warburg and Courtauld Institutes*, vol. 37(1974), pp.218 48; N. H. Peterson, “The Quarant’Ore: Early Modern Ritual and Performativity”, in P. Gillgren, M. Snickare, *Performativity and Performance in Baroque Rome*, London 2017, pp.115 33を参照。
- 49 Schiavi 2018, p.133; Navoni 2019, p.197.
- 50 Schiavi 2018, p.122.
- 51 Bascapè 1610, p.168.
- 52 Navoni 2019, p.197.
- 53 Ferri Piccaluga 1992, pp.173 93; Schiavi 2018, pp.138 45.
- 54 Ferri Piccaluga 1992, p.174; Spiriti 2019c, p.204.
- 55 Schiavi 2018, p.139. 広場への群像の設置は1579年以前から考えられていた。
- 56 Sannazzaro, “La città dipinta”, in Buratti 1982, pp.95 96; Buratti 1982, pp.50 52; Baldissarri 1985, pp.11 18 : 『ヴァラッロのサクロ・モンテ』 p.154.
- 57 Giussano 1610, p.286.
- 58 Sannazzaro, “La città dipinta”, in Buratti 1982, pp.95 97; Stewart 2015, p.247.
- 59 Buratti 1982, p.50; Sannazzaro 1982, p.95.
- 60 Giussano 1610, pp.327 28.
- 61 Giussano 1610, p.328.
- 62 Giussano 1610, p.286.
- 63 Baldissarri 1985, pp.14 15.

- 64 Baldissarri 1985, pp.14 15.
- 65 Baldissarri 1985, p.17.
- 66 Buratti 1982, pp.96 97; Baldissarri 1985, p.18; Stewart 2015, p.216.
- 67 Baldissarri 1985, pp.19 23; Stewart 2015, p.234.
- 68 Baldissarri 1985, pp.251 52, 261.
- 69 Baldissarri 1985, p.18, 251; Stewart 2015, p.276.
- 70 Baldissarri 1985, p.23, 252; Stewart 2015, p.277.
- 71 Buratti 1982, p.50.
- 72 G.P. Giussano, *Libro delle Sette Chiese*, Milano 1593, pp.43 44.
- 73 Baldissarri 1985, p.19, 256; Stewart 2015, p.277. 「聖十字架同信会」の1577年の会則によると、行列は何らかの機会に「聖釘」の昇降の儀式や行列、「聖釘」の前でクワラントーレが行われる際にも会員たちが参列するようにも定められていた。
- 74 Baldissarri 1985, p.31.

